

カナダ日系人の擁護者ヘンリー・F・アングスの精神的遍歴

“My first seventh-five [sic] years : (1891-1966)” より

照 井 悦 幸

はじめに

2017年4月、カナダ連邦政府が日系人の強制収容を実施してから75年となった。これに合わせて、強制移動の舞台となったブリティッシュ・コロンビア州政府は、日系カナダ人が強制収容された施設跡地を含む州内の56カ所を日系人に関連する史跡に指定すると発表した（毎日新聞2017年4月3日）。州政府のテレサ・ワット多文化主義政策担当相は「歴史の暗部」を記憶にとどめ、思いをはせることが大切だとコメントしている。多文化主義を掲げるカナダの、今日におけるエスニック・マイノリティへの政策が実を結んでいくためにも、ワット担当相がいう「歴史の暗部」へ光を当てる作業は重要なものだといえる。

第2次世界大戦時の不当な迫害や強制収容の詳細が明るみになって来たのは、30年以上が経過した1980年代になってのことである。これは、苦い経験を被った日系人当事者たちが、目立たぬようカナダ社会に同化していくことを望み、長く沈黙を守り続けたからだと言われる。そうしたなか、自らが迫害と強制収容を経験したケン・アダチ（Ken Adachi）による日系カナダ人の歴史を記述した、“The Enemy That Never Was, A History of the Japanese Canadians”が出版され、その後、ジョイ・コガワの『失われた祖国（“Obasan”）』（1981）をはじめとする被害者側からの視点で描かれた書物が見られるようになった。そうしたいわば、日系人による歴史の証言が蓄積される一方で、1941年前後のカナダ国内の政治状況背景を記録し、カナダの日系カナダ人政策を論じたもの、日系カナダ人の問題を日加関係、あるいは米加関係という国家とのかかわりのなかで論じた研究、多文化主義カナダの問題として論じる視点なども提示されてきた（Sunahara : 1981、飯野 : 1993、和泉 : 2013）。

ヘンリー・F・アングス（1891-1991）は、カナダ政府側に身を置きながらも最後まで日系人の抑圧政策に異を唱え、抵抗を示した人物である。ブリティッシュ・コロンビア大学経済学部教授であったアングスは、1937年にカナダ王立委員会の英国自治領—州政府関係（Canadian Royal Commission of Dominion-Provincial Relation）のメンバーに任命され、その後、1940年から41年にかけては同じく王立委員会の日系カナダ人問題（Japan Problem）に関係する2つの諮問委員会に関わりを持った。ひとつは日系人の徴兵問題に関する証言者、もうひとつは、日系人を監視下に置こうとする日系人登録に関わる委員会メンバーである。この登録に際しては、担当した王立騎馬警察（RCMP）の実施監視人であった。そして、日米が開戦する5ヶ月前の1941年7月からは、連邦政府の対外関係省（External Affairs）の任に当たっている。

当時の日系カナダ人政策に関わって、カナダ政府には明白な“Villains（悪者）”と“Heroes（英雄）”が存在したと指摘するのはスナハラ（1981）である。スナハラは、日系人抑圧の立案に影響力を持つメンバーたちの数人を、“Jap hater”として識別する。大戦勃発後、多数派の見解を無視するかたちで日系人を強制移動させたのも、強制移動時におけるすべての資産の押収という内閣令を実現させたのも、ほんの一部の強力な“Jap hater”（日本人を嫌う者）たちの影響力であった。

こうした政策に最後まで抵抗した人物たち、ヒーローのひとりに、アンガスの名が挙げられるのである。拙論「ヘンリー・F・アンガス『カナダ生まれの日本人へのメッセージ』：カナダ日系人の“Hero（英雄）”として」（盛岡大学研究紀要第33号、2015）は、スナハラという日系人のヒーローという意味を検証したものである。この論文では、1932年にはじめて発行された日系コミュニティ英字新聞、『THE NEW AGE』（ブリティッシュ・コロンビア大学図書館所蔵）の一面に、写真入りで掲載されたアンガスによる寄稿文を紹介した。白人系カナダ人社会に同化を試みながらも、差別に苦悩する日系2世に対するアンガスのメッセージは、カナダ社会における日系人の存在価値を称えながら、若い2世に対しての現実的な助言を与える内容であった。ヘンリー・F・アンガスの研究は、スナハラの指摘を展開させ、カナダ主流社会に身をおく白人系カナダ人と言う立場から見た日系人社会と、人種による差別や迫害に対する見方や考え方を探ろうとするものである。移民や難民者に対する差別や迫害は、今日も依然大きな問題となっている。カナダ日系人コミュニティは、4世代から5世代の時代を迎えるとともに、新しいスタイルの移民者も受容し始めている。そうしたなかであって、1930年代の激動した時期に、マイノリティーのために力を尽くした人物の行動や思想を考察する価値は大いにあるのではなかろうか。

ヘンリー・F・アンガスには、国際経済、加米経済関係に関わる論文が残されているが、日系カナダ移民者あるいは第2次世界大戦当時の日本人問題に関する直接的な著作は見つかっていない。しかし、ブリティッシュ・コロンビア大学レアブック・スペシャルコレクション（RARE BOOKS & SPECIAL COLLECTIONS）のなかに、アンガス自身によるタイプ原稿の回顧録、“My first seventh-five [sic] years : (1891-1966)”を見つけ、当時の日本人問題に関係する記述を探し出すことが出来た。本稿ではこの回顧録から、日系人について述べている第6章“International Affairs, 1927-1937”の‘b) Oriental in Canada’と、第8章“World WarII, 1939-1945”の‘d) War with Japan’の内容を取り上げてみたい。

国際状況が大きく戦争に向かい、カナダ国内の日系カナダ人が敵性とされていく時、彼らのカナダに対する忠誠心が問題とされた。アンガスの回顧録には、日系人と忠誠心に関わる記述が多く目に付く。まずこれに焦点を当てる。次に、東洋系移民者に対する、差別する側への批判が各所に書き込まれている。アンガスの人種差別批判には共通する認識がある。彼自身のことばでパニック・アクションと表現されるものである。この点について論述してみたい。

本文では、この“My first seventh-five [sic] years : (1891-1966)”を『回顧録』として表記し、この中からの引用は、アンガスが記述した英語原文と拙訳を付して、（アンガス回顧録、ページ）のように記載していく。

1、UBC, Japanese Students' Club とアンガス

—“Report of the Survey of the Second Generation Japanese in British Columbia”

アンガスと日系人との関係はどう構築されたのか。ここでは、この関係を示した資料について記述しておきたい。1932年にホズミ・ヨネムラらによって刊行された日系コミュニティの英字新聞『THE NEW AGE』、創刊号1面に写真入りで掲載されたアンガスのエッセイ“Message to Canadian-Born Japanese”（「カナダ生まれの日本人へ」）は、まさしく「カナダ生まれの日本人」への励ましが書き込まれたものである。日系2世らは、社会的マイノリティーとして依然冷酷な環境の中で、何の後ろ盾でもなく奮闘していた。アンガスはこの若者たちに「忍耐と自信」という二つのことばを贈った。そして、「……忍耐と自信。この2つを陶冶する気持ちは、あなた方自身が市民であるカナダの繁栄に求められるものである」（照井、2016：86）とメッセージを締めくくっ

ている。

日系コミュニティでの英字新聞は、カナダにおける不当な立場を訴える術を求めた2世たちが立ち上げたものである。アダチは1938年に創刊された『The New Canadian』の掲載記事がバンクーバー地域の主要な新聞紙上にに取り上げられたことで、日系人の「白人主流社会に対する視点が、史上初めて表明された」（1976：159）としている。この『The New Canadian』に先立って創刊された新聞が2つあった¹⁾。そのひとつが、アンガスが記事を寄せた『THE NEW AGE』である。

ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）の政治、経済の教鞭をとっていたアンガスは、UBCの日本人学生クラブ（University Japanese Students' Club）と関わりがあった。『The New Canadian』紙の記事（Vancouver, Oct.10, 1941）には、このクラブの学生たちが主催する講義開催の案内が掲載されているが、その会場がアンガスの自宅になっている（照井，2016）。どのような経緯で『THE NEWAGE』創刊号のトップにアンガスのエッセイが寄稿されたのかは定かではないが、UBCの学生としてアンガスと親しく関わりを持った2世たちの依頼であったことは間違いないであろう。後の刊行となる『The New Canadian』の主幹、トーマス・ショウヤマもUBCで学び1938年に卒業している。アンガスとの関係が推測される。日系2世のコミュニティ活動の中心となっていたのは、UBCのJapan Students' Clubのメンバーであった。アダチ（1973）は以下のように記述している。

2世の中核を担う、主にブリティッシュ・コロンビア大学の日本人学生クラブは、彼らのカナダにおける厳しい立場を説明する新しい方法を探し始めた。

A cadre of Nisei, mainly members of the Japanese Students Club at the University of British Columbia, began to seek new ways to explain their harsh position in Canadian life... (Adachi, 1973: 158)

アンガスと日系2世との繋がりを示すもうひとつの刊行物がある。1935年に刊行された“Report of the Survey of the Second Generation Japanese in British Columbia”「(ブリティッシュ・コロンビアにおける第2世代日本人による調査報告)」である。日系人が置かれているカナダ社会の現実を、主流社会にいる人々に理解してもらうこと、それが彼らの状況を変えていく方法だとして、2世たちは日系コミュニティに関するあらゆる側面に関する事実調査を実施した。これはB.C州における第2世代日本人を対象にした調査で、内容はB.C州における人口、教育環境、労働環境、婚姻状況、社会状況の5つのセクションで構成されている。監修はアルバータ大学の卒業生であるノブイチ・ヤマオカとなっている。the Committee for the Survey of the Second Generation Japanese in British Columbia, The Canadian Japanese Associationによって出版され、序文には1935年の夏に戸別調査を行い、調査メンバーとして5人のUBC学生の名前が挙げられている²⁾。このプロジェクト・グループのアドバイザーのひとりがアンガスである（アダチ，1973：158）。アダチはアンガスを以下のように紹介している。

ヘンリー・フォーブズ・アンガス、ブリティッシュ・コロンビア大学政治経済学部長、2世の完全な市民権を強く擁護する人物である。彼は、荒涼とした情勢のなかで日系人たちを鼓舞した数少ない一人である。

...Henry Forbes Angus, Head of the Economics and Political Science Department of

the University of British Columbia, and forceful advocate of full citizenship rights for the Nisei. He provided one of the few sources of inspiration in the bleak climate of the day. (Adachi, 1973 : 158)

以上のように、アンガスと日系コミュニティとのかかわりは、1930 年前半の UBC の日系 2 世学生との関係を通じて構築されたものであろう。

加えて、経済学者のアンガスと日本や日本人との接点がもうひとつある。太平洋問題調査会 (Institute of Pacific Relations) である。この調査会でアンガスは、新渡戸稲造をはじめとする日本人研究者たちとも知り合っている。アンガスとこの関係については、次の機会にまとめることにしたい。

2、B.C 州の東洋人について 一人種差別へのアンガスの視点

『回顧録』、第 6 章 “International Affairs” の ‘b) Oriental in Canada’ には、B.C 州の東洋人に対するアンガスの見方や考えかたが記述されている。この冒頭は、使命感にあふれる以下のような文章から始まる。

私の極東に対する関心は高まっていて、向き合うべき課題が急を要する重要なことだと痛感させられていた。同時に、自分自身の無知の程度もはっきりと自覚していた。大学における講義として取り組んだものの、私は自問したのである。不十分な知識ではあるが、ブリティッシュ・コロンビア州の東洋系移民者とその子孫たちの何かに役に立ち、東洋人の立場を向上させるためには、何をすべきなのか。

My interest in the Far East has been aroused and I was impressed with the importance of the issues that had to be faced and with the dangers of delay. I was also acutely aware of the extent of my ignorance. Much as I had done in approaching university teaching, I asked myself what I, in spite of my meagre qualification, could usefully do and to attempt to improve the position in British Columbia of immigrants of Oriental race and of their descendants. ... (アンガス回顧録、p.233)

アンガスの関心は日系人に限るものではなく、社会的に不当な立場に置かれた東洋系移民者すべてに及ぶものである。こうした正義感はどこから来るものであろうか。アンガスは、東洋系移民者グループを中国人、東インド人そして日本人の 3 つとしたうえで、「同様に弱い立場に置かれるが、3 つの人種は社会・経済的に異なった状況におかれている」(アンガス回顧録、p.233) と指摘する。また、インド人はイギリスの臣民であり、中国人、日本人の一定数は 1914 年前後までに帰化している。そしてカナダで生まれた子供たちはカナダ人であったと記す。日本の法律が二重国籍についてどこまで言及しているのかははっきりしない。しかしながら、ブリティッシュ・コロンビアでは、どの東洋系の人にも州、連邦政府に対する選挙権は与えられていない。多くの社会的な権利は、選挙権があるものに限定されていた。そしてアンガスは、1930 年当時の B.C 州東洋系移民者の概要を以下のように締め括った。

選挙権がないこと、それ自体が弁解の余地のない口実とされて、多くの職業から東洋系は

排除される。法曹界などは特に遮断されている。こんな有様が、私が直面したものだだった。

This disability, itself indefensible, was made the pretext for exclusion from a number of occupations, notably from the legal profession. (アンガス回顧録、p.233)

参政権がないとただに留まらず、そのことで不遇な立場に置かれる東洋系カナダ人の現実。そしてこの不正に大きな問題意識を抱くアンガスが読み取れる。

3、日系人のカナダへの忠誠心をめぐって

第 8 章 “World WarII の ‘d) War with Japan’ では、アンガスの記述を通じて、カナダの敵国となっていく状況のなかで、カナダで生きていこうとする日系人に突き付けられた問題が浮き上がってくる。カナダと日本のどちらが本国なのか。カナダ生まれの 2 世にとってこの答えは明確であったが、B.C 州の人々が日系人に向けるのは疑いの目であった。アダチ (1973) は、B.C 州の議員と出身者ら、B.C ネイティブ (Native Son of B.C) と自称する者たちの文書として、以下のような文を引用している。

カナダ生まれの日本人は、自分達をカナダ人だと思ったことは 100% ないし、そう思うようなことは、1% もないだろう。

The Canada-born Nipponese never has and never will think of himself as Canadian (100 percent or 1 percent). (Adachi, 1973: 159)

アンガス『回顧録』の記述には、カナダへの忠誠心について述べられたものが目につく。この問題が日系カナダ人をめぐる大きな問題であったことを裏付けているといえる。以下、アンガスの記述から忠誠心についての記述部分を取り上げてみたい。

第 2 次世界大戦への日本の参戦が間近となる 1940 年から 41 年にかけて、アンガスは日系人問題に関する二つの王立委員会 (Royal Commission) に召集される。一つ目は、アジア系カナダ人を軍役から外すべきかどうかという問題を扱うものであった。アンガスはその証言者の一人として呼ばれる。『回顧録』のなかで以下のように述べている。

日本人は、軍役につくことを切望している。そして彼らは十分に信用できる人たちである。日本人を召集することで、ブリティッシュ・コロンビアでの人種関係にどんな影響を及ぼすのかは、別の問題である。しかし委員会は、政府に対して日本人を軍隊に含めるよう助言しなかった。それどころか、安全保障を理由に、すべての日本人を監視体制として登録させるべきだと助言したのだった。

Those of Japanese race were anxious to serve and in my opinion entirely reliable. What effect calling them up might have on race relations in British Columbia was another matter. The Commission did not advise their inclusion in armed forces and went further in advising that all persons of Japanese race should be registered for security purposes.

(アンガス回顧録、p.302)

1941年1月8日、カナダ首相マッケンジー・キングは、日系人を軍隊に召集しないこと、そしてB.C州日系人の登録を断行することを発表した。同時期に、カナダはドイツ、イタリアとすでに交戦状態にあった。しかし、ドイツ系、イタリア系のカナダ居住者などの登録は実施されることはなかった。日系人は、1941年3月から8月末までに出席して登録することが義務付けられた。アンガスは、王立騎馬警察 (RCMP) によって実施された日系人登録の実施監督者の役目を申し付けられている。

完全に協力的な人々を扱うという通常にはない経験に、RCMPは驚いたことであろう。登録によって不法な入国者を発見することを〔当局は〕期待したのだろうがしかし、そんな日系人は、唯一、一人だけであったと思う。

I think that the RCMP were surprised by the unusual experience of deals with people who were completely co-operative. Registration was expected to detect illegal entrants. It is my impression that only one was found. (アンガス回顧録、p.302)

軍役に服すことは、日系人にとってカナダに対する忠誠心を示すチャンスであった。しかし、そうした機会を得ることは皆無とっていいのであろう。1945年1月になって初めて、日系カナダ人2世150人が、英国の要請によって軍隊に受け入れられている (飯野、1997)。

1941年12月7日、アンガスが日米の開戦を知るのは、アメリカ、オハイオ州のクリーブランドで行われていた会議に参加中でのことであった。議長を務めていた太平洋問題調査会で活躍したエドワード・カーターによって、アンガスら参加者に開戦の報告がなされた。『回顧録』の中で日米の開戦について、アンガスは以下のように書き始めている。

アメリカ、カナダともにすぐ問題になったことは、日本国籍の者、カナダで生活する日系の者、カナダで生まれたもの、そしてカナダに帰化した者らの問題である。

An immediate problem, both in the United States and in Canada, concerned the treatment of Japanese nationals and of persons of Japanese race who were Canadian citizen either by birth or naturalization.... (アンガス回顧録、p.318)

アンガスは、イタリア、ドイツとは先に交戦状態となっているが、日系人を「イタリア人やドイツ人と同等に扱われるのが当然というわけにはいかない」(They might well have been treated precisely as German and Italian nationals and Canadian citizens of German and Italian race had been treated (アンガス回顧録、p.318) と述べる。その理由は以下のように記される。

・・・ヒットラーを嫌うドイツ人は多数いたし、ムソリーニを嫌うイタリア人も多数いた。だが、天皇を嫌う日本人はいない。

...the while there were plenty of Germans who detested Hitler and plenty of Italians who detested Musolini there were no Japanese who detested the Emperor of Japanese. (アンガス回顧録、p.318)

そして、天皇に対する特別な思いを持つ日系人とその忠誠心について、盛んに主張されるB.C州

からの日本人追放の議論との文脈のなかで以下のように続けられる。

私の個人的な見解としては、合法的に恭順を求める国家への〔日系人の〕忠誠心は、我々の意図にかなうに十分に強いものだということである。……日本人が強制収容されなければ B.C 州は血の海になるという議論はまったくばかげている。もし、法律を遵守する忠誠なる日本人を罰したならば、他の人種のカナダ人が犯してしまうかもしれぬ殺人に対する、復讐的な身代わり刑罰になってしまうであろう。

My own view was that the loyalty to the country of lawful allegiance would be strong enough for our purposes... The contention that there might be blood-shed in British Columbia if persons of Japanese race were not interned seemed to me absurd. It would have been vicarious punishment with a vengeance if we punished loyal and law-abiding citizens of Japanese race because Canadians of other races might resort to murder,

(アンガス回顧録、p.319)

日系人のカナダへの忠誠心に関するアンガスの見方をいくつか紹介したが、最後に別の資料から日本が中国と交戦状態になった当時、1940 年の 10 月に書かれたアンガスの文章を紹介しておきたい。Granatstein and Johnson は、当時のカナダ首相、マッケンジー・キングの日記（“King Papers, Diary”, 8 January 1941）から、有力なジャーナリストであったジョン・W・デフォとのやりとりのなかで述べたアンガスのことばを、以下のように引用している。

若い日本人は、状況をよく理解している。最初、彼らは（私は、みな誠実な者たちだと思っている）親日で反中国を言い散らしていた。しかし、彼らは今「日本が何をしようとも、自分達には責任のないことだ」と言うようになった。私は彼らに言う。日本のことを宣伝するような行為が、残念ながら、人々に対して彼ら日系人を紛れもなく（カナダ人ではなく）日本人なのだと感じることを感じさせてしまっている、そしてその印象を払拭する方法を見つけるのは大変難しいのだと。

The young Japanese understand the position well enough. At first they (in all good faith I think) distributed a good deal of pro-Japanese, anti-Chinese propaganda. Now they say, "we are not responsible for what Japan may do." I tell them that they have unfortunately made people feel that they are identified with Japan by their action in distributing propaganda, and that it is very difficult to find a way of removing this impression. (Granatstein and Johnson, 1988: 109)

天皇に対して厚い忠誠心を示す日系人を受け止めて、そういう忠誠心を持てる人間だからこそ、カナダに対しても十分に応えてくれるはずだという理解である。アンガスの日系人に対する信頼が読み取ることができる。

日本がカナダの敵国となった状況で問われた、カナダに対する日系人の忠誠心は学生たちを中心に日系 2 世をよく知るアンガスにとって何も問題になるものではなく、その理解は確信に満ちていたといえる。そしてそのことを率直に主張した。飯野（1997）、は、アメリカで日本人の忠誠心を深刻に問われたのは徴兵問題であったが、カナダの場合は、強制移動では満足せずに、日系人を国

外追放しようとする反日派の計画のなかで問題にされたと指摘する。すなわち、国外追放の基準あるいは口実として忠誠心を問題にしたというものである。アンガスの主張は不当に無視されたのである。

4、差別する側のパニック・アクションへの批判

ここでは、東洋系、特に日系人を差別する側に対するアンガスの見方に注目したい。根拠のない恐怖心や不安感を煽り、そのパニック状態の心理が理由となつて、異人種に対して不合理な申し立てや様々な不自然な思い込みが生まれてくる。アンガスは、白人たち主流社会の行動をパニック・アクションと表現し、これが東洋系マイノリティーの迫害を引き起こす大きな原因と認識していたといえる。

1941年、真珠湾での攻撃と同時に東南アジアでの日本の軍事行動がはじまった。同年12月25日、イギリスが植民地にしていた香港が陥落する。2,000人のカナダ兵が捕虜となった。カナダでは多くの人々が結集し、組織的に反日系運動が激化していく。そして、ナチのプロパガンダが根拠のない大嘘“big lie”を振りまいたように、B.C州の知られた公人たちが、日系人からのありもしない脅威を騒ぎ立てたという記録が残る（スナハラ、1981：30）。事実とは離れている事柄を契機にして煽られた不安感や恐怖心が、一般民衆の日系人抑圧、人種差別を過激にして行く。このスナハラから引用した記録は、まさにパニック・アクションが発生する状況であったといえる。B.C州からの議員らを中心に、高まる日系人を危険視する主張をアンガスは以下のように振り返っている。

……私としては、軍や海軍、空軍当局にえて、R.C.M.P.が主張する〔日系人への〕警戒は、すべて〔それでよいと〕受け入れてもかまわない。ただし私は、民間人の恐怖心を理由にして呼び起こそうとする〔日系人への〕警戒には強く反対した。

...I was ready to approve of all precautions asked for by the responsible military, naval and air force authorities and, in addition, any precautions for which the R.C.M.P. might ask. I was strongly opposes to additions to these precautions on grounds of civilian panic. (回顧録、p.319)

「民間人の恐怖心を理由にして呼び起こそうとする〔日系人への〕警戒」とは、パニック・アクションに他ならない。

日系コミュニティの人口増加は、B.C州の主流社会にとって大きな脅威とされていたひとつである。このことにアンガスは、日本人は家族で移民して来るので、他の民族に比べてより増加率は大きいと分析したうえで、日系人の人口増を脅威とする者たちについて以下のような評を下す。

人騒がせな人たちに冷静な、合理的な見方を求めるのは難しい。文化的同化により 増加率は減少することを認識させることも。……しかし、覚えておいてもらいたいのが、他のグループより早い速度で増加した場合、結果的にそのグループは他のグループの数に勝るのだ。「複利」という考え方を思い出しなさい。常識として明確にさせておくが、殺すか追放でもない限り、人口が大きくなるように運命づけられているグループが、人種と出産率や生存率に対するあなたの勝手な思い込みで、不遇にさせられ、反感を持たれるような筋合いはないのである。

I had the greatest difficulty in getting alarmists to take a responsible view of the matter and to realize that the race of growth would diminish... But, bear in mind that if any racial group increase at a faster rates than other racial groups it will eventually outnumber them. Remember compound interest! As you can neither kill or deport, you should as a matter of common sense, make sure that a group destined, in accordance with your belief in a peculiar racial birth and survival rate, to be numerically dominant is not embitter and antagonized. (アンガス回顧録、pp.234-235)

合理的な見方や常識に対する、マジョリティーの勝手な思い込みへの痛烈な批判である。自己中心的な思い込みで反感を持たれ、不遇な立場に立たされているのがマイノリティ・グループだと主張するものである。『回顧録』第8章のd) War with Japan の終盤には、以下のような文章がある。

B.C 州に住む日本人の運命は、アメリカによってとられたパニック行動で封じ込まれた。あの有名な権利章典があるにもかかわらず。ほんの少しの例外を除いて日系人は太平洋岸から 100 マイル地域から内陸に移動することを要求された。多くの財産も、日系人より信頼できるというカナダ人によって、盗まれたり、めちゃくちゃにダメージを与えられたりしたのである。

The fate of the persons of the Japanese race in British Columbia was sealed by the panic action taken by United State, in spite of its famous bill of rights. In Canada, persons of Japanese race, with a few exception, were required to leave a zone extending 100 miles inland from the Pacific Coast. Much of their property was stolen or wantonly damaged by more “trustworthy” Canadians. (アンガス回顧録、p.320)

いわずと知れた憲法による人権の保障規定は、パニック・アクションによって簡単に無視され、その行動はカナダ人として生きていこうとした B.C 州の日系人の運命を阻んだと、アンガスは指摘するのである。

5、口封じされたアンガス —1943 年春

人種問題に関わるパニック・アクションを嫌うアンガスは、日系人ら東洋系移民者に対する彼自身の発言に、自らが感情的な言動とならぬよう慎重に注意を払った。『回顧録』では、この問題に対して、自身が率直で客観的に論じようとする態度を度々口にする。アンガスは言う。

私は、政策として、日本が人種の不平等について〔カナダ社会に対して〕戦う姿勢をとりたくなるような状況を作るべきではないと思った。私は、この件について、あるいはこれに関する会議に於いて、極端な発言はとってはいない……

I also thought that as a matter of policy we should not make it easy for Japan to pose as fighting for racial equality. I was never extreme in the matter and in our conference.... (アンガス回顧録、p.319)

白人主流社会が、些細な噂からでも、日系人に対する脅威として騒げば騒ぐほど、むしろ根も葉もない嫌疑をかけられた日系人は危険な行動に向かう。極端に日本人を擁護してきたわけではない。あくまでも、合理的な議論を求めるとアンガス述べるのである。

他者と同調しない、感情を抑制する自身の態度が、時に周囲から孤立していたことにも気づいていた。『回顧録』第6章の ‘Oriental in Canada’ の最後では、「少しも感情を出さずに、カナダにおける東洋人のことを述べてきたけれど、感情的なものを抜きにした結果、自分はそれで全くの不人気となった」(Although I expressed myself on these matters without the faintest trace of emotion, perhaps indeed because I avoided emotion, I became unpopular.) (アンガス回顧録、p.236) と記す。第8章の ‘War with Japan’ の中では「私は自己の意見を表明するのに何も隠しだてはしない。興奮したり、暴力的にはなったりはしないが、他から敵意を招くこともあった」(I made no secret of my opinions and, although I expressed them without excitement or violence, I incurred some hostility.) (アンガス回顧録、p.320) とも回想している。

1941年の7月以降、アンガスは連邦政府の External Affairs (対外関係省) の役人に任命されていた。そしてアンガスは、同じく対外関係省に所属するヒュー・キンリーサイドとともに、政府の強硬な日系人抑圧政策に反対を唱え続けていた。1943年、B.C州太平洋沿岸から100マイル地域から内陸への強制移動を実施したあとも、日本人国外追放の議論が激化する中で、激しい反対発言が原因でアンガスとキンリーサイドは関係会議から更迭されるという出来事が起きる。スナハラ(1981)は以下のように伝える。

対外関係省のヒュー・キンリーサイドとヘンリー・アンガスは、完全に口封じさせられた。彼らが政策に対して「品格や人間性に基づいて正当化できない」と遠慮のない発言を浴びせたのに対して、その政策に賛成する上司から問題視されたのである。1943年の春までには、両者ともに議案決定過程からはじき出されることになる。

Hugh L. Keenleyside and Henry F. Angus of External Affairs, had been virtually muzzled. Their blunt comments on policies they considered “unjustifiable on any basis of decency or humanity” had annoyed those among their superiors who had supported those policies. By the spring of 1943 Keenleyside and Angus had been squeezed from the decision-making process. (Sunahara, 1981 : 101)

アンガスは上司の怒りに触れて口封じされたのである。加えて『回顧録』から、この時にあらぬ容疑もかけられていたことが知ることができる。

Both Hugh Keenleyside and I were criticized in Parliament and a Member from British Columbia, Tom Reid, actually said that someone on the staff of External Affairs, clearly meaning me, had bribed by the Government of Japan.

ヒュー・キンリーサイドと私は議会で批判された。そして、ブリティッシュ・コロンビアからのメンバー、トム・レイド (Tom Reid) は、対外関係省のスタッフの誰か、これは明らかに私を意味していたが、日本政府から賄賂を受け取っているといった。

(アンガス回顧録、p.320)

1945 年の選挙の後、レイドの告発は証拠がないと首相が認めたという。アンガスは「誰もその告発を真剣に受け取ったものはいなかったが、『証明されず』という判断と、『中傷を認める』ということは全く違うものである……」(I don't think that anybody ever took the charge seriously, but a verdict of "not-proven" is not quite the same thing as an admission of deliberate defamation....) (アンガス回顧録, p.321) と記述している。当時のカナダの社会状況にあって、白人主流社会に属しながら日系人コミュニティを擁護することに、かなりの精神的強さが求められたことを伺わせる事実である。

結語

本稿では、ヘンリー・F・アンガスの回顧録、“My first seventh-five [sic] years : (1891-1966)” に記述されている文章の一部を紹介しながら、日系人の擁護者と言われるアンガスのみたカナダ社会と日系人の問題、そして彼の人物像を探ることを試みた。日本と米国が開戦し、カナダ、イギリスと敵対していく前後において、アンガスが記述する日系人との関わりで目に付くのは日系人のカナダに対する忠誠心を巡る問題であった。しかし、強硬な反日系派にとっては、はじめから忠誠心そのものなどには関係なく、日系人の追放のための口実として忠誠心を問題にしたという指摘が後の研究で示されている。そういう中で、アンガス主張は無視されていくのであるが、彼の日系人の忠誠心に対する理解は確信に満ち、日系人に対する信頼感も読み取れるものである。カナダ生まれの日本人に向けて、新聞紙上に掲載した「忍耐と自信」という励ましのメッセージが、こうしたカナダ社会における日系人が置かれる現実の客観的な認識から生まれてきたということも裏付けられるであろう。

根拠のない恐怖心や不安感を煽り、そのパニック状態の心理が理由となって異人種に対して不合理な申し立てや様々な不自然な思い込みが生まれてくる。日系人追放も、まさにそうした心理から生まれてきたものであった。パニック・アクションということばが、人種問題を語るアンガスの記述に使われていた。彼の人種差別に対する厳しい批判は、パニック・アクションに陥る人間たちへの批判である。アンガスは、人種問題に関わるに当たって、冷静さ、道理を求める。そしてその信条を貫くこと、日系コミュニティを擁護することは、彼の身を危うくしたという事実も明らかになった。アンガスの、日系人をはじめとするアジア系カナダ人の不遇な場立場を助けようとする強い正義感の源泉はどこにあったのだろうか。

注釈

- 1) 『THE NEW AGE』の刊行後に、『The Japanese Canadian』が創刊されている。主幹はピーター・マスダ。
- 2) このレポートは、Nikkei National Museum の Banno Family Collection に所蔵されている。

参考文献

- 飯野正子 『日系人カナダ人の歴史』東京大学出版 (1997)
- 和泉真澄 『鉄条網なき強制収容所—第二次世界大戦下の日系カナダ人—』立命館言語文化研究 25, 1, 119-135 (2013)
- 照井悦幸 「ヘンリー・F・アンガス『カナダ生まれの日本人へのメッセージ』：カナダ系人の“Hero (英雄)”として」『盛岡大学紀要』第 33 号、山口北州印刷 (2016)
- Granatstein, J.L. and Johnson, Gregory A.
 ‘NA, J.W. Dafoe Papers, Angus to Dafoe, 15 October 1940’ in “The Evacuation of the Japanese Canadians, 1942 : A Realist Critique of the Received Version” (1988)
- Adachi, Ken “The Enemy That Never Was, A History of the Japanese Canadians McClelland and Stewart (1976),

カナダ日系人の擁護者ヘンリー・F・アンガスの精神的遍歴 “My first seventh-five [sic] years : (1891-1966)” より (照井 悦幸)

Angus, Henry Fobe “My first seventh-five [sic] years : (1891-1966)” (1967)

Sunahara, Ann Gomer The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War, Toronto, James Lorimer & Company. (1981)